

のないもの。pm \sim s₁に相当する X 線型は、m sm 型と s₂s₃ 型の間像で軽度の壁不整像変形像を認めるもの。s₂s₃ に相当する X 線型には、占居部位は 2 領域以上と広く、高度な壁不整像を呈するため、胃変形も高度なもの。

29. 先天性胆道閉鎖症の成因に関する臨床的基礎的研究

鈴木昭一 (千大)

最近 15 年間に教室において経験した先天性胆道閉鎖症は 52 例、乳児肝炎は 7 例である。先天性胆道閉鎖症の生後 60 日以内の前期群は病理組織学的に乳児肝炎ときわめて類似性をもつことがわかった。

さらに、先天性胆道閉鎖症の成因を追求するために α -naphthyl-isothiocyanate (ANIT) を妊娠ラットに投与することにより、新生仔ラットに実験的胆道閉鎖を複製することをこころみた。

30. 高令者胃癌の一例

坂本昭雄, 蜂巢 忠, 吉川広和 (幸手病院)

年々高令者手術は増加しつつある傾向にあり、それに伴い高令者の術前術後の管理の重要性が問題となってきた。われわれは最近、肺機能および腎機能の悪い 84 才の高令者胃癌に対し、硬膜外麻酔をもって胃切除術を行ない、また、術後合併症に対し中心静脈栄養法を施行しそれに対処した。また、当病院における s. 48.4 より胃切除術 50 例、胆膵術 24 例につき、とくに高令者における術後合併症に関し、若干の文献的考察を加えて報告する。

31. 若年者胃癌の一例

山室美砂子, 三好弘文 (熊谷総合病院)

若年者胃癌は全胃癌数の 2~3% を占め、それほど稀な疾患とはいえない。しかしその中でも、20 才未満の頻度は著しく低い。われわれは最近 10 代の若年者胃癌の 1 例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は心窩部痛を主訴とせる 18 才の女性で、胃角部に Borrmann III 型の癌があり、胃切除術兼大網切除術を施行した。組織学的には未分化腺癌であった。術後 3 カ月の現在、健在である。

32. 胃の Reactive Lymphoreticular Hyperplasia (RLH) の一例

坂庭 操, 藤代国夫, 田 紀克, 向井 稔
(国保成東)

胃の RLH は臨床的に早期胃癌、悪性リンパ腫等と鑑別が困難である点から注目されているが、われわれはこの一例を経験したので報告する。患者は 75 才の男で主訴は心窩部痛と食欲不振である。5 年来胃多発性潰瘍の消失と再発を繰り返していた。手術標本では体部より胃角部にかけてやや硬い壁の肥厚とびらんを認め、組織学的に RLH の所見を認めた。

33. 空腸癌の一例

山本義一, 斎藤全彦, 原 壮 (清水厚生)

69 才男。主訴は悪心嘔吐、昭和 49 年 5 月 3 日より毎晩、悪心嘔吐が 1 回あり、腹部不快感も出現、10 kg の体重減少もみられ、可動性ある腫瘤を触れた。低緊張性十二指腸造影にて、空腸上部の輪状狭窄、辺縁の不整、レリーフ像の乱れあり、空腸悪性腫瘍の診断のもとに 6 月 19 日手術。Treitz より 30 cm に拇指頭大の腫瘍あり輪状狭窄を呈し、腹膜播種を認めたので、空腸を 15 cm 姑息的に切除。組織は乳頭状腺癌、s₂、リンパ節転移はなかった。

34. 過去 10 年間の腹部外傷症例の検討

唐司則之, 岡田 正, 二宮 一,
今津 曄, 曾野文豊 (県立佐原)

過去 10 年間、県立佐原病院で経験した腹部外傷 61 例の中、検討し得た 42 例について検討した結果、原因別では交通事故によるものが、26 例 62% と圧倒的に多く損傷臓器別にみると、腸管損傷 19 例、45.2% が最も多く、ついで腎損傷 8 例、後腹膜損傷 7 例、脾損傷 6 例、腸間膜 5 例、肝、大網損傷それぞれ 4 例、睪損傷 2 例であった。死亡例は 6 例で腸管損傷のみられた 19 例中 5 例と最も多く、腸管損傷のあるものに死亡率が高い事が判明した。

35. 胆嚢微小癌の一手術例

相馬光弘, 日浦利明, 小浜智哉,
原田康行 (船橋中央)

術前胆嚢結石と診断された 56 才女性の胆嚢微小癌を経験したので報告する。摘出胆嚢より結石 9 個、底部に直径 6 mm の小隆起があり、組織標本にて粘膜より筋層におよぶ腺癌と診断された。胃癌等と比し胆嚢癌は予